

## 2014年度 第2回 全体研究会

■報告題目：仏教の自然観とエコ・フィロソフィ

■報告者：竹村牧男（東洋大学学長，筑波大学名誉教授）

■コメンテーター：桂 紹隆（龍谷大学文学部教授，BARCセンター長）

■開催日時：2014年10月24日（金） 13:15～15:15

■開催場所：龍谷大学大宮学舎本館2階講堂

■参加者：44人

### 【報告のポイント】

現代を生きる我々が直面しているものとして、環境問題がある。日本においては各大学で様々な角度からそれを解決しようとする活動が行われており、東洋大学でも、以前から「エコ・フィロソフィ学際研究イニシアティブ」を設立し、取り組んでいる。このような学術の流れのなかで、竹村牧男氏は、特に思想的な方面からその問題に関わってきた。本研究会では、環境問題に対して、仏教の自然観を解説しその考え方を提示した上で、ノルウェーのアルネ・ネスの思想である「ディープ・エコロジー」を紹介し、両者の共通した環境に対する普遍的な見方を探った。

### 【報告の概要】

まず竹村氏は仏教から環境を考える可能性を探るため、仏教の基本的な自然観、「十界」を取り上げた。

悟りと迷いの世界を十種に分ける「十界」は、餓鬼に生まれたら餓鬼の環境世界、地獄に落ちたら地獄という環境世界、人間は人間界という環境世界に生きる、という捉え方で、この人間世界の環境だけが唯一という訳ではない、とする。仏となったら仏に相応しい環境世界（仏国土）に居ることになる。また、人間の住んでいる世界は苦しみの多い娑婆世界であり、そこから脱して「極楽浄土に往生する」ということが人々の間に願われた。

このような世界観であるとする、仏教には、「人間社会の改善」よりも「別の良い所への移動」が優先され、環境に取り組むという思考の方向性が全く無いように思えるが、実際はそうではない。親鸞の教えのなかでも「(往相に対する)還相」が説かれるように、「浄土」というものを教えのなかで教わりながらその意味を探り、そこから現実社会の意味を反省し、改善に取り組む、という考え方もある。竹村氏は、この考え方に立脚すれば、仏教から環境を考える可能性がみえてくる、とする。

ついで、竹村氏は「自己と環境の関係性」について仏教ではどのように捉えるのか、いくつか典拠を示しつつ紹介した。

大乘仏教の基本的かつ普遍的な見方である唯識思想では、「ひとつの命」を、身体だけを指すものではなく、身体が環境と交流している全体・総体で捉える(「人人唯識」)。

華嚴宗では、仏を「三世間融合の十身仏」とし、智正覺世間(悟りを開いた仏)、国土世間(その仏が住んでいる世界)、衆生世間(仏が住んでいる世界にいる生きとし生けるもの)の三つが合わさって仏が形成されることを説く。この考え方をさきの唯識を背景に考えてみると、これは「仏」に限定されるものではなく、「自分」と「自分が置かれている環境」、「その環境に住んでいる他者」、その全てが自己である、という見方が成立する。

また、仏教には『法華経』に代表されるように「娑婆世界=仏国土」という考え方もある。華嚴宗でもほぼ同様の考え方がみられる。

日本天台では「草木国土悉皆成仏」という言葉が生み出され、真言宗でも空海の著作のなかに「この世は仏を本体としている」という表現が頻繁にみられるように、「人間世界の自然ひとつひとつが仏のいのちそのもの」という立場を持つ。そこで「この世は本来仏の世界であり、それをどう自覚し本来の仏の世界を発揮させていくか」ということが課題となる。仏教を通して環境を考えた際には、これらの思想が重要になる。

竹村氏は以上のように仏教の環境に対する考え方をまとめたうえで、ディープ・エコロジー(環境哲学)の思想を紹介した。

ディープ・エコロジーとは、アルネ・ネスが提起した、徹底的な生命平等主義に立って、エコロジーを考えようとするものである。その一番のポイントは、「世界全体が自己」という自覚から行動規範が出てくる、ということである。ネスは、自我というものを自分が思っているものを超えた存在であるとし、環境と一体であり他者とも不可分であると捉えた。そういった

自己を見出していく中で、おのずから環境に対する配慮や、人生の生き方が出てくる、とする。これらネスの思想のなかでも、「自己と世界のつながりの自覚のなかで、関係の全体が自己になるという立場が開かれる」という点は、仏教に近似するものである。

ただ、こうした考え方は現代では忘れ去られ、なかなか理解されない。特に今日では近代化・合理主義・科学技術の発展など現代文明を背景としたアメリカ流の強い個人主義がグローバル・スタンダードとなっており、宗教が照らし出した自己のあり方は、もう忘れ去られている。宗教界はもう一度「本来的な自己のあり方」を世に訴えていく必要があり、重要な課題となっている。

最後に竹村氏は、研究会の内容を踏まえて、「環境問題をどのように捉え解決していくのか」ということに対する仏教の可能性を提示した。

仏教から環境について考える一つの手がかりになるものとして、「身土不二」という考え方がある。自己というものは環境と切り離せない、環境もまた自己であるという環境観である。また「娑婆即寂光土」という思想、自然世界は仏のいのち、体そのものだという思想がある。それらの思想は、環境と自己を考える上で、大きな可能性を持つといえる。

また、環境倫理学という大きな分野のなかには、「世代間倫理」という問題がある。これも仏教によって捉え直すと、空間的な関係性だけでは無く、時間的な縁起もあり、それも「自己」に含まれるというところから、世代間倫理の根拠を見出すことが可能ともなる。

以上のように、仏教は様々な環境問題を解決する要素を持つ。仏教を通して、そもそも人間が何を目指しているのか、ということをよく考えておかねばならない。そういうことが、ライフスタイルの変化、社会の変革、技術を導く方向性に繋がるのではないかと述べて、竹村氏は報告を締めくくった。

#### 【議論の概要】

コメンテーターである桂紹隆氏は、アルネ・ネスの思想がウパニシャッドの「梵我一如」の考え方を取り入れていることを指摘した。また竹村氏が紹介した天台・華嚴・真言の思想の背景には、仏性、あるいは本覚思想といった考え方が深く関わっていること、大乘仏教のなかには「釈尊こそが本物のアートマン（真実の自己）を説いた」という考えがあり、仏教徒たちもある意味でアートマンを追究してきたということに触れ、その思想が日本人の仏教理解にあた

って受け入れやすかったのではないかと、また、ネスの思想とこれらの日本仏教の思想は近似性が強いのではないかと感想を述べた。その上で、天台思想にある「草木国土悉皆成仏」に代表される自然と一体化するような思考、アニミスティックな思考は日本特有のものかどうか、意見を求めた。

竹村氏は、日本人固有のものとして、無意識に自然と一体となる心情は持っているが、仏教のなかではそれを論理的に究明している。そのため、それは日本人がもっていた素朴なアニミズムではない。ただし、そのような論理的究明を持っていたにも関わらず、現代においては忘れ去られてしまっている。民衆は未だに素朴なアニミズム観をもっている一方、パブリックなものに対する意識が欠落していて、日本人独特の悪しき行動様式もみえている。素朴な意識をもう一度思想的に鍛える必要がある、と答えた。

中村尚司氏は、現代における人間と動物の関係性についての事例を挙げつつ、ヒューマニズムを重視していくと、片方でアニマライズを圧迫してしまうという問題があることを指摘し、ディープ・エコロジー運動の実践にあたって、この問題をどのように対処していくのか、意見を求めた。

竹村氏は、生命中心主義は理想的であるが、現実には様々な問題があることは間違いなく、人間が人間として恵まれたいのちを生きるためには仕方ない部分もあるが、ことさらに殺す、などという行為は慎むべきである、とした。

